

倒木更新

木崎 俊造 陸自76

陸上自衛隊と米太平洋陸軍による日米共同演習（通称ヤマサクラ演習）に参加したことがある。すでに退官してOBとなっていた身だったが、主宰の部隊長から指揮官メンターを要請されたからだ。

メント (Ment) の原義は「心」、メンター (Mentor) は「助言する者」という意味になる。指揮官は、独りで最終決断を下し、重大な責任を一人で負わなければならない。メンターは、その指揮官の心の支えを担う者のことである。

現職の指揮官が自分にふさわしいと思う者をメンターとして選ぶ。後輩が先輩を選ぶのである。メンターは、その存在をなるべく表には出さないようにしながら、四六時中、指揮官の傍らにいる。そのため、現職時の能力と経験が優れていても、ウマの合わない先輩をメンターにしてしまうと、大変な思いをすることになる。一方、人当たりがよく後輩思いの先輩ではあるが、演習の

成果向上につながらなかつたりすると、ガツカリしてしまう。そんなこともあって、現職の指揮官は、メンターの選考に当たっては熟考することになる。

OBとなつて2年目の正月のことだった。国内外情勢の展望などの特集で分厚くなつた新聞には興味も示さず、一杯の盃で酔っぱらつた身体を横たえ、演芸の番組にニタニタしている時に電話が鳴つた。3年後輩の北部方面總監からだった。現職の總監ともなると、正月も酔っぱらうことはないのだろう。（何かあつたのか）テレビを消した。つきなみな新年のあいさつを交わした後に、「来年度、北部方面隊がヤマサクラ演習を担当します。先輩！ 私のメンターになっていただけませんか？ 是非とも！」

岩田總監は、元気がいい。言葉遣いも力強く、はっきりしている。頼もしい後輩である。（私をメンターに）私は反射的に「無理、無理、無理」と答えていた。いっぺんに酔いもさめた。すると彼は、「演習内容についての助言は、得田先輩（私の5期先輩）にお願いしたいと思っています。先輩はそばにいてくださるだけでいいですから、お願いします」と付け加えた。

「そばにいていい」彼の言葉に他意はない。彼の私に対する素直な思いである。しかし、少しだけ複雑な気持ちになつたことは否めなかつた。（これって、褒められていいのか、喜んでいいのか）

退職以来、国内外の情勢や自衛隊の動向、日米共同訓練の現状、そんなことへの興味を一切合切どこかへ返納した身であつた。もう一度、我が身に呼び戻すことなどできるものか。「いまさらジロードよ」という言葉が、思わず口をついてしまつた。しかしながら、引き受けた以上はメンターとしての資質を向上させ、心構えなどを確立して臨まなければいけない。こんな時だけ、長年培つてきた使命感がむっくりと頭をもたげた。

書棚を見まわし、メモ帳をひっくり返す。メモ帳の表紙には「気になる一言シリーズ」と記されていた。読後感などをメモした雑記帳だ。その中に、「老木が倒れ、その栄養分で若い木が育ち、それがやがて大木となる。大木となつたその木は、やがて老木となつて倒れ、栄養分となつて次の世代へ。繰り返される生命循環：『倒木更新』」

これだ！ と思つた。メンターの立場は、現職の栄養分となることだ。OBには栄養分もあれば、そうでない部分もある。特に、気をつけなければいけないのは、現職時の失敗をひけらかして武勇伝にしてしまうこと。また、ささやかな成功話を大きく膨らまして、ほら話のように吹きまくることである。

大きく二度うなずいた。指揮官メンターは、『倒木更新』の精神で取り組むべきだと確信した。

岩田君が私を指名してから7年間、次の後輩、また次の後輩も私を指名してくれた。中には義理で私を選んだ總監がいたかもしれない。

やがて、そんな役割は終わった。私のメンターとしての栄養分は、完全に尽きた。私なりに全力をそそいできた。

20歳前から50年間にわたり、我が国の安全保障と自衛隊の世界に身を置いてきた。そんな、自分の死（おわり）を迎えたようだ。これで新たな世界に入ることができる。

此岸から彼岸へ。のような、とてもスッキリとした気持ちをかみしめている。